錦神社と五輪台

歴史伝説のにえの柵と藤原泰衡のところでみたように、泰衡は河田次郎によって謀殺されるが、その後、首のない泰衡の屍は、里人によって錦の直垂（ひたたれ）に大事に包まれて埋葬された。この墓が「にしき様」と呼ばれて神社になり、錦神社となって今も二井田の上出向（かみいでむかい）に祀られ、毎年旧九月三日にお祭が催されている。

二井田村の南西約三㌔の五輪台（北秋田郡比内町）には、泰衡のあとを慕い長い旅を続けてきた奥方と忠僕にまつわる話がつたわり、その遺跡は西木戸神社として祀られている。

この話には二通りの伝えがあり、一つは、泰衡の妻「里（りん）」と忠僕「吾兵衛」は、泰衡を慕い東北の山路を追ってきた。里は追手の目をのがれるために男装し、吾兵衛にはげまされながら西館（比内町）までたどりついたとき、泰衡の悲しい最後の報を知ってその場で自害し、吾兵衛も後を追い死出の供をして果てたという。里人は二人を憐れみ大切に埋葬し塔を建て供養し、里の黒髪を切って泰衡の墓へ埋めたともいわれている。二人を埋葬した土地を二人の名をとって吾里台（今は五輪台）と呼ぶようになったという。

今一つは、泰衡のあとを慕って長い苦しい旅を続けた奥方は、河田次郎の謀略で討たれた泰衡の最後を聞き、すっかり力を落として家来の由兵衛に、「生きていて何の楽しみがありましょう。一ときも早く主人の所へ参りましょう」と、自害しようとした。由兵衛もお供をしてと申すと、「ここで二人が死んでは、後を見とどけ弔う者がいなくなる。おまえは生きていてほしい」と頼み、奥方は自害した。由兵衛は奥方に命じられたとおり、最後を見とどけ墓をつくり、自分は大木のほら穴に庵を結び、僧になって近くのムラを念仏をしながら巡回し、帰り道に小石をふところに拾って帰っては奥方の墓へ積んだ。これを後の世の人は五輪塔と呼び、この地名を由兵

衛岱と呼んだ。

なお、五輪台の五輪の大石は、平泉から落ちのびてきた弁慶の大足駄の歯にはさまってきた大石である、という弁慶伝説もある。